

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：34303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730635

研究課題名(和文) 大学生の動機づけ調整スタイルの検討

研究課題名(英文) Examination of the motivational regulation style of undergraduate

研究代表者

赤間 健一 (AKAMA, Kenichi)

京都学園大学・人間文化学部・嘱託講師

研究者番号：40469078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：しなくてはならないがやる気が出ないような時、大学生がどのようにしてやる気を出して行動し始めているかということについて研究を行った。このような経験は授業において多く、自分にとってのメリットを見出したりするなど5つの方法を使ってやる気を出していた。またやる気になりにくい状況についても調べたところ、できそうにないときやストレスを感じているときなど6つの状況に分類できた。実際にやる気を出すためには、自分のやる気の特徴ややる気になりやすい方法などを知っている必要があることも確認された。

研究成果の概要(英文)：In this study, it was examined how undergraduates initiate their motivation under the situation which they feel demotivated. Especially, the motivation for the courses of university was examined, because they experienced difficulty to motivate themselves in the activity. Five strategies they use motivating themselves were identified, for example, they search the advantage for themselves to do the activities. The situations they need to use these strategies were classified into six, for instance, they are stressful, or they feel that they cannot do it. The process they motivate themselves was also examined. The knowledge that the situation they can motivate themselves easily, or the strategies they can motivate themselves successfully is needed to regulate their motivation. In the process, it was clarified that the more knowledge they have, the more they use the strategies to motivate themselves, and the higher their motivation is.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：動機づけ調整 メタ動機づけ 動機づけ困難状況 動機づけ始発方略

### 1. 研究開始当初の背景

社会情勢の変化から大学生の就職活動が長期化し、また内定率も7割を割る状況が続いていた。大学生が就職活動に疲弊し、大学生活においても講義への出席等、動機づけを維持することが容易ではない状況が見られた。さらに大学設置基準が変更され、就業支援が事実上義務化された。大学において大学生が就職し、働き続けるために、またその準備としての大学生活や就職活動において活動し続けるための動機づけについて考える必要性が増していた。

動機づけに関しては、多数の概念や理論について多くの知見が蓄積されている。本研究においては学習方法や成果にポジティブな影響を示す自律性、およびその獲得に寄与する行動・結果の価値、有能感、あるいは自己効力感、さらに達成目標を扱う。さらに1980年代後半から現在に至るまで学習者が自身の学習過程に対し、積極的に関わり、動機づけや学習方略をより効果的にしていく学習方法である自己調整学習に関する研究が増大し、動機づけはその一部として扱われている(Zimmerman, 1989)。動機づけの調整を考える際にも、自己調整と同様にモニタリングとコントロールを中心としたメタ認知の考え方が有用と考えられる。

自己調整学習においては、動機づけの調整も含まれているが調整対象としては、認知や行動が中心であり、動機づけの調整を扱った研究は少ない。さらに、研究対象の多くは高校生までであり、大学生を対象とした研究は少ない。

### 2. 研究の目的

- (1)現在の大学生がどのような活動領域を持ち、それぞれの領域においてどのような動機づけ状態で活動しているのか、また、各活動領域をどの程度重視しているのかについて現状を把握することを第一の目的とする。
- (2)同じ活動においてもやる気になったりならなかったりする。活動を行うことが必要な場合には動機づけを維持、向上させ活動を継続しなくてはならない。そこで、自身の動機づけ状態のモニタリングによる状態把握、維持、向上のためのコントロールとメタ認知的な視点から動機づけ調整を考える。メタ認知の視点を取り入れ、動機づけの調整方略を特定し、各学生が用いやすい調整方法から動機づけ調整スタイルを導き出すことを第二の目的とする。

### 3. 研究の方法

(1)現在の大学生の活動領域、およびそれら領域における動機づけの現状の把握のために質問紙調査を実施した。活動領域として講義、サークル、アルバイト、その他、と選択肢を用意し、自由記述により詳細を記入させた。活動領域として多くあげられた上位3領域において動機づけとして自律性、自己効力感、

目標を測定した。を測定した。

(2)大学生の動機づけ方略による調整スタイルの特定のために、調整スタイルを構成する動機づけ方略、メタ動機づけ、動機づけ困難状況を測定する尺度を作成した。自由記述により項目を収集し、その後調査を繰り返すことで尺度作成を行った。

(3)調整スタイルの検討のために、調整方略、メタ動機づけ、動機づけについて質問紙調査を実施した。

### 4. 研究成果

#### (1)大学生の活動領域と動機づけ

大学生の主要な活動領域として、講義、部・サークル活動、友人関係が抽出された。それぞれの活動を重視する程度、またその理由を自由記述で求めた結果、重視しているほど自ら活動に関与しようという自律性が高い理由が多かった。また、いずれの活動においても、自身にとって意味がある、価値があるという動機づけが強く、部・サークル活動と友人関係ではやりたいからするという動機づけも強かった。これに対し、授業にはやりたいからするという動機づけは弱く、動機づけの調整が必要となる活動であることが示唆された。領域間の動機づけの関連については、友人関係における動機づけと授業に対する動機づけの一部に弱い関連が見られたのみでほぼ独立していた。そのため、調整が必要と考えられる授業に対する動機づけを対象としてこれ以降の研究を進めた。

#### (2)尺度作成

動機づけ調整スタイルの構成要素となる動機づけ方略、メタ動機づけ、動機づけ困難状況を測定するための尺度作成を行った。

やらなければならないがやる気が出ず行動していない時に、自身のやる気を出し、行動を行うために使用する方略を測定する動機づけ方略尺度は行動の価値を見出す動機づけ方略、終了後に自身に報酬を用意する自己報酬方略、しなかった場合の悪い結果をイメージする罰想起方略、気分転換を図るなどの欲求解消方略、友人と一緒に行動するなどの社会的方略の5つの方略が抽出された。またそれ以外に、思い切って始めるという動機づけ方略の種類は不明である意志力と、やる気を出すことをあきらめる調整放棄という2尺度も同時に抽出された。項目例を表1に示した。

表1 動機づけ方略の種類と項目例

価値づけ方略	自分のためだと考える
自己報酬方略	終わった後に自分にご褒美を用意する
罰想起方略	しなかった場合に起きる嫌なことを想像する
欲求解消方略	やりたいことをしてから始める
社会的方略	友人と一緒にする

メタ動機づけ尺度は、動機づけについて知識であるメタ動機づけ知識、動機づけの状態を把握し、高めるための方略の使用を決定す

る動機づけ調整, また自身のやる気の状態への関心のなさを示す無関心, やる気の調整ができると思えない不全感の4下位尺度から構成された。項目例を表2に示した。

表2 メタ動機づけ尺度の項目例

メタ動機づけ知識	自分がやる気になる時わかっている
動機づけの調整	やる気を出そうと努力する
無関心	やる気の状態に興味がない
不全感	やる気を出そうとしない

動機づけ困難状況は, やる気をなくしやしい, やる気を出すことに困難を感じる状況であり, 個人差を測定するための尺度を作成した。そのため体調不良や嫌な他者がいるときなど多くの者が動機づけにくいと感じる状況は尺度から除外した。尺度は, できる気がしないという低効力感状況, やる意味が分からないという低自律性状況, 落ち込んでいるような抑うつ状況, ストレスを感じているストレス状況, 他にやりたいことがある低優先度状況, 締切まで時間があるという時間的余裕状況の6下位尺度から構成された。項目例を表3に示した。

表3 動機づけ困難状況の種類と項目例

低効力感状況	できる気がしない時
低自律性状況	する意味が分からない時
抑うつ状況	落ち込んでいる時
ストレス状況	イライラしている時
低優先度状況	他にやりたいことがある時
時間的余裕状況	締め切りまで時間がある時

尺度の信頼性は, 内的整合性と1か月間隔で2度の調査を実施し再検査信頼性により確認した。いずれの尺度も使用するに足るだけの信頼性が確認された。妥当性については, 因子構造の確認と, 動機づけとの関連について先行研究や理論を基に予想される結果が得られるかによって確認した。

### (3) 動機づけ調整スタイル, 動機づけ過程

作成した尺度を用い, 動機づけ調整スタイルについて検討した。まず, 動機づけ調整に使用する方略のタイプを検討した結果, 動機づけ方略の使用においては, いずれの方略の使用する程度が同程度であるが, 平均程度に使用する群, 使用頻度が低い群の2群に加え, いずれの方略もよく使用するがあきらめることも多い群, 欲求解消や社会的方略のような行動と直接関連しない方略を使用しあきらめることが多い群, 価値づけや自己報酬, 罰想起といった行動と関連付けた方略を使用することが多い群の5タイプが抽出され, 方略使用のタイプからは5つのスタイルが存在する可能性が示唆された。

次に, やる気をなくしやしい状況についてタイプを抽出した結果, いずれの状況においても程度はほぼ同じであるが, なくしやすさが平均程度, なくしやしい, なくしにくい,

という3タイプと, 抑うつやストレスといった心理的な問題には影響を受けにくい1タイプが抽出された。

動機づけ方略と動機づけ困難状況の関連については, 個別の方略と状況間にはほとんど関連がなく, 特定の状況において使用されやすい方略が存在するわけではない可能性が示された。方略の使用と困難さを感じる状況のタイプ間の関連も検討したが, 各タイプに含まれる人数が大きく異なり, 少数のタイプについては十分に検討ができなかった。しかしながら, いずれの状況においても動機づけることに困難を感じやすいタイプほど, 多くの方略を用いるタイプであり, 動機づけについても他のタイプよりも高い傾向が示された。そのため, 動機づけることに困難を感じるというよりも, 動機づけへの意識が高いために低下に敏感であり, 動機づけを維持・高揚させようと多くの方略を使用し, 結果として動機づけが高い可能性が示唆された。困難さの程度が平均的なタイプは, 方略の使用頻度も平均的であり, 前述のタイプよりも動機づけは低かったことからその可能性が考えられるだろう。

さらに動機づける際のメタ動機づけの役割を検討するために, 「メタ動機づけ→動機づけ方略→動機づけ」というモデルを構築し, その妥当性を検討した。その結果, 自身の動機づけの特徴や効果的な方法を含むメタ動機づけ知識があるほど, 動機づけの調整を行い実際に様々な動機づけ方略を用いた結果, 動機づけが高まるということが示され, モデルの妥当性が確認された。そのため, 動機づけ方略を使用し, 自身を動機づけるためにはまず自分自身の動機づけについての知識が必要であると考えられる。また, 動機づけ方略と動機づけの関連については, 価値づけ方略はやりたいからする, 自分のためになるからするという動機づけを高め, 自ら行動を起こすことにつながるために望ましい方略と考えられる。これに対し, 仕方なくする, 義務だからするという動機づけは, 多くの方略から影響を受けていたが, これは様々な方略を使用しないと動機づけることが困難であることを示していると考えられる。そのため, 行動する際の動機づけとしては, ただ必要だからといった動機づけではいろいろなやり方を併用しないと行動を起こすことが難しいとも考えられる。

### (4) 本研究の意義と今後の課題・展望

本研究では研究自体が少ない大学生の動機づけ調整について検討した。現在の大学生の活動領域や各領域を重視する理由や動機づけについて明らかにしたこと, そのうえで特に授業に対する動機づけについて検討する必要性があることを確認した。大学生の現状を踏まえたうえで必要とされる領域について検討した研究であり, 現実に対する応用を考える際に役立つものといえるだろう。

特に, 動機づけ調整においてもやる気を維

持するための方略は研究が存在するが、やる気を出すための方略を扱ったものはほぼなく、学術上の意義は大きいだろう。またメタ動機づけ、動機づけ困難状況についてもこれまでに扱った研究はほぼなく、本研究の知見は動機づけ調整研究の今後の発展のために有用な結果であると考えられる。

今後は大学生が自身の動機づけの調整を行うことができるように、メタ動機づけ知識の獲得や動機づけ方略の獲得、有効な方略の発見のための支援、介入方法を検討することが必要となるだろう。また現在使用している方略や保有している知識がいつ、どのように獲得されてきたかということについて発達的な見地から検討することも介入方法を考えるうえで役に立つだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ①赤間健一 (2012). 動機づけから考える大学生にとっての授業 人間文化研究, 査読なし, 29, 125-151.
- ②赤間健一 (2013). 友人関係・課外活動の動機づけと学業の重要度, 動機づけの関連の検討 人間文化研究, 査読なし, 30, 51-73.
- ③赤間健一 (2013). やる気喪失状況と動機づけ方略, 及び動機づけの関連の検討 人間文化研究, 査読なし, 31, 1-11.

〔学会発表〕（計 4 件）

- ①赤間健一 (2012). メタモチベーション尺度作成の試み 日本心理学会第 76 回大会(於専修大学)
- ②赤間健一 (2012). やる気調整尺度作成の試み 日本教育心理学会第 54 回大会(於琉球大学)
- ③赤間健一 (2013). やる気喪失状況尺度作成の試み 日本教育心理学会第 55 回大会(於法政大学)
- ④赤間健一 (2013). 動機づけ調整モデルの検討 日本心理学会第 77 回大会(於北海道医療大学)

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ

[http://www001.upp.so-net.ne.jp/k\\_akama/](http://www001.upp.so-net.ne.jp/k_akama/)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

赤間 健一 (AKAMA, Kenichi)

京都学園大学人間文化学部嘱託講師

研究者番号：40469078

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし